国連人口部主催「人口構造と開発シンポジウム」

国連人口部主催・エイジング総合研究センター共催の「人口構造と開発シンポジウム」が，昭和61年9月10日（水）から12日（金）にかけて3日間東京都千代田区内幸町の富国生命ビルにおいて開催された．このシンポジウムは外務省が協賛し，厚生省人口問題研究所が協力したものである．

長い間先進国は低出生率・低死亡率を経験してきたが，1965年前後からの激しい人口置き換え水準以下の出生率の低下と高齢人口における死亡率の低下によって，人口高齢化がにわかに進行してきた．我が国のような人口に関して後発の国においても，高齢化は最大の人口問題となった．他方，発展途上国の中でも，シンガポール，中国，カリブ海の島嶼国といったところで出生率が大いに低下し，人口高齢化は必然のコースとして多くの関心と懸念を集めつつある．以上の点にかんがみて，人口高齢化の人口学的メカニズムを明らかにし，その社会経済的インプリケーションを評価する会議を国連が開催することは時宜にかなった重要な意義を持つものとして認識されるに至ったのである．そこで30数名に及ぶ世界各国の専門家，関連国連機関の代表者が参集し，「人口高齢化の世界的課題」，「高齢化の経済的インプリケーション」，「人口高齢化と老人扶養」，「高齢化の社会的インプリケーション」，「人口高齢化における青少年の問題：競合と補足」，「途上国における人口高齢化」という議題に沿って活発な討議が行われ，最終日の9月12日に報告書と勧告がまとめられた．

シンポジウムに出席した専門家，関連国連機関の代表者は総じて30数名に上ったが，このほかに日本から多くの傍聴者が出席し，非常な盛会となった．著名な専門家として，元国連人口部長でユーゴスラビア学士院会員ミロシュ・マツウラ博士，前国連人口部長で現在ＣＩＣＲＥＤ副議長レオン・タバ博士，プリンストン大学社会学部教授ノーマン・ライダー博士，フィリピン国立大学人口研究所長メルセデス・Ｂ・コンセプシオン教授，日本からは日本大学の黒田俊夫，岡崎陽一両博士が出席された．人口問題研究所からは河野稠果所長，阿藤誠部長，松下敬一郎研究員が出席し，それぞれ担当した基調論文の部分を報告した．

当人口研が作成した基調論文は“Social and Economic Implications of Aging Population”と題する141ページの大部の報告書で，全体は四つの章に分かれ，第1章は“Change in age structure and its effect on youth population”（阿藤誠・大谷憲司），第2章“Aging of population and labour market”（松下敬一郎），第3章“Social consequences of changing family and household structure associated with the aging population”（河野稠果），第4章“Population aging and social expenditure”（府川哲夫）となっており，さらに序論（河野稠果），結論“Two cheers for the aged society”（河野稠果）が加えられている．そのほか，河野稠果所長は第2日目の午後，「人口高齢化における青少年の問題：競合と補足」および「途上国における人口高齢化」という部会の総合討論者 discussion leader の役割を果たした．日本人の専門家として，黒田俊夫教授が，「高齢化の社会的インプリケーション」のセッションの議長を務め，日本大学の小川直宏博士が総合討論者を臨時に務められた．

当人口研が提出した基調論文はそれぞれの章に分け独立の論文として，国連の*Population Bulletin*に将来所収される予定である．また，本シンポジウムで得た成果の内容については，期を改めて本機関誌に報告されることが予定されている．

（河野稠果記）

「韓国社会における人口変動と文化・社会変動に関する調査」への参加

東洋大学の高橋統一教授，松本誠一講師と当研究所の清水浩昭技官は，1986年8月15日から9月3日まで「韓国社会における人口変動と文化・社会変動に関する調査」に従事した．

今回の調査は，韓国の近代化と伝統的価値観との関連を農村の老年層を対象にして人口と家族および文化の側面から検討することにあった．この調査研究は3カ年のプロジェクトであり，今年度は第1年目にあたることから研究課題について識者の見解をうかがうことと関連文献・資料の収集に重点をおいた．

筆者（清水）は，人口高齢化と老親扶養の分野を担当したが，農村から都市への人口流出に伴う人口高齢化と核家族化の進展によって老年層は，扶養問題について苦悩し，模索している状況を把握することができた．